

学生災害ボランティア「リーダー」 育成プログラム

Student Volunteer Leader Training Program for Disasters

宮定 章¹

¹災害科学・レジリエンス共創センター

1. 事業の背景

災害科学・レジリエンス共創センター（以下、災害センター）は、パイロットプロジェクトの1つの「防災・減災・復興の担い手づくり」として、“大学災害ボランティアステーション（愛称：むすぼら）”を設立（2021年3月11日）し、和歌山大学の構成員の命を守る術や、災害で困難を抱えた人を支えるために、災害ボランティアの育成を行ってきた。

具体的には、担当の教職員が、全学の学生に助け合いの気持ちや技術を学んでもらうため、ボランティアステーションの勧誘をし、メンバーへ勉強会や訓練を実施してきた。令和4年度は、さらに災害ボランティアに関心を持ってもらうため、教養科目「災害ボランティア学」を実施した。同時にメンバーの中で、ワーキンググループをつくり、学生自ら自主的に活動できるように、運営している。

また、令和3年の六十谷水管橋崩落により、和歌山市北部では大規模な断水が発生した際、地元のピンチに立ち上がろうと、和歌山大学の学生・教職員が、給水ボランティア活動を実施し、のべ79名の学生が呼びかけに応じた。給水ボランティア活動がきっかけになり、活動を実施した貴志地区住民組織との地域づくりに関して連携が始まっている。

2. 事業の目的と計画

2.1 目的

和歌山大学内で災害ボランティア活動が認知されてきた中で、今後の本大学や関わる地域が災害にあったときに、ボランティア活動に参加するだけでなく、学内の仲間を巻き込み災害現場でも率先し

てボランティア活動を促進・コーディネートできる「リーダー」人材を育成し、社会や地域貢献できるようにする。

2.2 内容

【講座】災害ボランティアリーダー育成講座

講師による講座、ワークショップ、振り返りを、①初動期、②活動期、③復興期、④平常期の4期に分け実施し、災害時にどのようにリーダーとして動けるかの知識を習得する。

【実習】フィールドワーク（実際に被災地を訪問）

被災地を訪問し、被災者・被災地学習やボランティア活動を実践することで被災地での被害を実感し、大学生・大学として何ができるかを、現場から学ぶ。

【訓練参加・成果発表会】災害ボランティアセンター設置運営訓練にリーダー参加

2022年災害ボランティアセンター設置運営訓練（社会福祉協議会と連携）に、これまでの座学、実践の習得を活かして、訓練のプログラムづくりから参加し、訓練時のリーダーができるようにする。参加していない他の学生へ、災害ボランティアの経験を伝える成果発表会を、参加者が企画・実施する。

3. 実施プログラムの内容

3.1 募集

和歌山大学の学生（学部生・大学院生）を対象に、定員20名で、令和4年6月24日（金）～令和4年7月8日（金）の期間で、全学生へのメール、教員へのプロジェクト紹介依頼、災害センターのホームページで募集を行った（定員に満たないため、7月20日（水）まで延長）。

6月28日(火)、7月6日(水)に、検討中の学生へ説明会(対面・オンライン併用)を行った。

応募申請には、「参加希望動機」、「参加によって得たいスキル・心構え」、「参加によって得たいリーダー像」、「参加後の自身の行動目標(プログラム終了後行いたいと思うこと)」の記述を求めた。

3.2 参加者

11名(1回生5名、2回生4名、4回生1名、大学院生1名)から申請があり、災害科学・レジリエンス共創センター災害ボランティア部会が、和歌山大学の防災力強化を考慮し、全ての申請者を承認した。

3.3 事前準備

キックオフミーティングを7月21日(水)に行い、説明、顔合わせを行った。説明後、『災害時にも率先してボランティア活動を促進・コーディネートできる「リーダー」を目指して～仲間と共に「気づく力」「解決力」「コミュニケーション力」を育みあおう～』と題して、和歌山県社会福祉協議会和歌山県災害ボランティアセンターセンター長の南出考氏より、講話をしていただき、ボランティアリーダーの役割を教示いただいた。

7月26日には、現地の様子を現地学生より説明&実習の課題設定(グループワーク)を行った。熊本県人吉市出身で、熊本学園大学4回生(当時)で社福災害学生ボランティアグループ代表である山北翔大氏(以下山北氏)より、写真等を用いた体験談を聞き、想像力を深めた。その後、今回の現地訪問において、被災地の課題設定と、学生ボランティアができることのグループワークを実施し、グループ分けを行った。「作業系」「他地域や次世代に伝える」「聞き取りや調査し共有する」「コミュニティ支援、日常を取り戻す」をテーマに4グループに分かれた。

その後、9月の訪問までの期間を生かし、オンラインツールや、対面で、話し合いを重ね、山北氏や南出考氏(和歌山県社会福祉協議会)、事務補佐員林美由貴氏のサポートの元、学生自ら活動プログラムの計画を立てた。

3.4 実習

9月12日(月)～15日(木)で、令和2年7月豪雨で甚大な被害を受けた熊本県人吉市を訪問し、実習を行った。

■9月12日(月)

関西空港6時30分関西空港第2ターミナル集合と朝早い集合にも関わらず参加者一同無事集合し、定刻通りに鹿児島空港へ向かって離陸した。

到着後、借り上げたバスに乗り人吉ICで山北氏と合流しバスに同乗してもらい、13日に行う「作業系」のボランティア活動の事前準備のため、ボランティアをする依頼者宅を訪れ、挨拶をし、グループのリーダーを中心に翌日の作業工程等を確認した。依頼者からの災害直後の話を聞き、氾濫した球磨川を踏査した。その後、バスに乗車し、球磨川を下り、同じく被害のひどかった八代市坂本町を訪れ、熊本県立大学のフィールドワークの中で行われる現地での講義に連携させていただき、県立大学の学生と一緒に、道の駅さかもと駅長道野真人氏、リバーガイド溝口隼平氏等から、被災から復興までの講話を拝聴した。本学学生からも多数質問させていただいた。溝口隼平氏から、翌日の「作業系」ボランティア活動の資機材の提供を受け、積み込んだ。



図1 球磨川を視察(2022年9月12日)



図2 被災体験等聴講(2022年9月12日)



図3 ボランティア活動 (2022年9月12日)

■9月13日 (火)

朝8時半にホテルを出発し、浸水被害を面的に受けた人吉市下薩摩瀬町の個人宅を訪問し、「作業系」のグループを中心に家の庭にたまった土を取り除くこと、そして、小屋の中に水害後そのままになっている資材を整理し、小屋の中に入った土を洗い出し、綺麗にした。16時まで目いっぱい作業を行った。終了後の依頼者の挨拶時には、水害時の濁流の中で、しがみついてなんとか生き永らえた木を紹介してください、避難体験のエピソードから学生一同学んだ。

ホテルに戻り、着替えと休憩をしてから、会議室に集まり、ワークシートに振り返りを書き、その後、グループでディスカッションを行った。最後に、各グループから、学んだことを発表し、共有した。

■9月14日 (水)

朝9時に集合し、ホテル周辺の市街地のフィールドワークを行った。地元出身者で何度もボランティア活動に参加されている山北氏より説明を受けた。その後、市街地から少し離れた川の蛇行する箇所、被害の大きかった大柿地区へ車に分乗し向かった。ボランティア活動で通った山北氏より、お話を伺い、フィールドワークの中で、地元で被災された方からお話を伺った。昼からは、あやめ遊園仮設(村山公園)を訪問し、山北氏や熊本学園大学、社福災害学生ボランティアグループが行っているつながるカフェに参加し、山北氏の指導により、本学学生も一緒にカフェの準備を行った。準備が整ったところで、仮設住宅を回り、居住者へ声掛けを行った。居住者が集まってくださり、3グループに分かれ、災害直後のことや、地元のことを、お茶を飲みながらお話

の中で教わった。そして、「コミュニティ支援、日常を取り戻す」のグループが、和歌山から持参したお土産を披露し、話に花をさかせた。カフェ終了後、ほとんどの学生たちは、仮設住宅の内部を見たことが無いので、住民の方にご許可いただき、中を見せていただき、部屋の中の重たいものや高いところにあるものを移動させる等のお手伝いを行った。

16時半からは、ホテルに戻り、田中信孝先生(熊本大学非常勤講師、前人吉市市長)から、ご講話とまち歩きをしていただいた。

会議室に集まり、ワークシートに振り返りを書き、その後、グループでディスカッションを行った。最後に、各グループから、学んだことを発表し、共有した。



図4 つながるカフェテラシ (2022年9月14日)



図5 まち歩き (2022年9月14日)

■9月15日 (木)

朝8時にホテルを出発し、今回の豪雨災害のきっかけになった球磨川のフィールドワークを行うため、坂本町を訪問し、リバーガイド溝口隼平氏にお世話になり行った。実際、川を身近に接することで、自然の怖さと、川の素晴らしさを感じた。昼食には、

球磨川で有名な尺鮎（鮎は、時には30cm以上）くらい大きな鮎を、溝口様のご尽力いただくことができ、自然の恵みを実感した。

災害の残酷さと、人の強さを実感し、参加者はたいした怪我もなく、無事帰路についた。実施の様子は、地元新聞や朝日新聞^[1]に掲載されました。

3.5 訓練参加

参加者の一部は、11月に行われた和歌山市社会福祉協議会との災害ボランティアセンター運営訓練に参加した。

3.6 報告会

実習・訓練参加後、受講者は、振り返り学内の報告会を、教養科目『災害ボランティア』と、オンデマンドで全学対象に行った。



図6 報告会動画

4. 最後に

プログラムを終えて、学生の発表の報告から、言葉を借り、結びとする。

『今回の研修災害は「終わりはない」ということを学びました。

今回人吉市を訪れて、見たものは二年たった今でも残されている爪痕です。

線路や道路などの建造物だってまだまだ復旧、復興されていないですし、被災地の方々の中には、災害が日常を変え、非日常を創り出し、心にも除去しきれない爪痕を作っていました。

仮に表面上の目に見える復興が終わったとしても、心の中、目に見えない部分で傷が永遠に残り続け終わりはないです。

災害は、家族を失った人、家を失った人、友人を亡くした人、地元を亡くした人など一生残りうる傷跡も作っていきます。

つまり、災害には終わりはないということを私たちは学びました。

その中で、私たちができることは何か。その方法の1つが災害ボランティアであると思います。

ひとえに災害ボランティアといっても、様々なボランティア活動があります。瓦礫や泥などの除去活動はもちろん、被災者の話を聴くこと、コミュニティ支援、災害を風化させないために伝えていくことも災害ボランティアの1つです。これらの活動を今回私たちは経験してきました。

その経験を通して、多くの人達は、災害発生してから、二年以上たち、災害ボランティアが必要ないと思われていますが、今でも災害ボランティアには継続的に求められる活動が未だに沢山あることを学びました。

また、今回の研修を通して、災害ボランティア活動に共通することとして思いやりの心、行動を持った助け合い、寄り添いあいが必要であるということをも身をもって実感しました。

日々甚大化、頻発化する災害に対し、災害ボランティアの必要性はますます高まっていると思います。

その中で今回の研修に参加して学んだことは災害ボランティアをするうえで大切なことが詰まっていると感じます。また普段から活動でも役立つと思っています。したがって、その学んだこと今後活かしていきたいと思っています。』

佐藤周名誉教授には引率、山北翔大氏には、事前準備、現地コーディネート、本プログラムを応援してくださった熊本県の支援者・被災者、ご支援くださった和歌山大学基金、紀伊半島価値共創基幹の皆さまに、感謝を申し上げます。

注

[1] (わだいの災害科学) 現地で実感した事が次の代に / 和歌山県 (朝日新聞 2023年2月12日)